Osaka University Knowledge Archive

Title	One-Year Outcomes of Heparin-Bonded Stent-Graft Therapy for Real-World Femoropopliteal Lesions and the Association of Patency With the Prothrombotic State Based on the Prospective, Observational, Multicenter Viabahn Stent-Graft Placement for Femoropopliteal Diseases Requiring Endovascular Therapy (VANQUISH) Study
Author(s)	飯田, 修
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/87726
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

論　文　内　容　の　要　旨
Synopsis of Thesis

氏　名 Name	飯田修
論文題名 Title	One-Year Outcomes of Heparin-Bonded Stent-Graft Therapy for Real-World Femoropopliteal Lesions and the Association of Patency With the Prothrombotic State Based on the Prospective, Observational, Multicenter *Vi*abahn Ste*n*t-Graft Placement for Femoropopliteal Diseases Re*qui*ring Endova*s*cular T*h*erapy (VANQUISH) Study (実臨床現場における大腿膝窩動脈病変に対するヘパリンボンディドステントグラフト1年治療成績及び抗血小板薬効と開存の関連)

論文内容の要旨

〔目　的(Purpose)〕

大腿膝窩動脈病変に対するヘパリンボンディドステントグラフト実臨床における1年開存率を評価すること及び1次開存率に関連する血栓形成性を含んだ因子を同定すること

〔方法(Methods)〕

本研究は末梢動脈疾患 423肢 (糖尿病：57.3%、維持透析：17.8%)・370症例 (重症下肢虚血：25.5%、TASC II C or D：91.7%, 血管径：5.1±0.9mm、病変長：26±11cm)を対象にViabahn stent-graft with heparin bioactive surface (W.L. Gore & Associates, Flagstaff, AZ, USA)を用いた血管内治療を評価した前向き・多施設研究である。本研究では、全例で血管内超音波 (IVUS: intra vascular ultrasound)を用いてステントグラフト治療を施行し、また治療時にPRU (P2Y12reactionunit)を計測した。主要アウトカムは、1年開存率であり、副次アウトカムは、大切断率・外科的治療移行・再治療・血栓性閉塞とした。

〔成績 (Results)〕

平均年齢は75歳、糖尿病は57%、維持透析は17.8%であった。重症下肢虚血は全体の25.5%、TASC II C or D 91.7%, 血管径 5.1±0.9mm、病変長 26±11cm、完全閉塞病変は71.6%であった。1年開存率は、フルカバー群で80.3% (Spot群は68.0%, p=0.025)であった。多変量解析の結果、IVUSにて評価した血管径が開存喪失予測因子であった。一方PRUを用いた血小板反応性は開存率に関連はなかった。フルカバー群の1年大切断率は0.3%、外科治療移行率 2.2%、再治療率 13%、ステント血栓症は6.1%であった。

〔総　括(Conclusion)〕

実臨床現場に大腿膝窩動脈病変に対するヘパリンボンディドステントグラフト1年治療成績は良好であった。IVUSを用いて評価した小血管は有意に開存低下に関連し、抗血小板薬反応性は開存に関連しなかった。

論文審査の結果の要旨及び担当者

（申請者氏名）		飯田　修	
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主　査	大阪大学教授	坂田泰史
	副　査	大阪大学教授	桑木紘哉
	副　査	大阪大学教授	新谷康

論文審査の結果の要旨

症候性末梢動脈疾患に多数合併する大腿膝窩動脈病変に対し従来型カテーテル治療では再発率は高い。一方で新しく使用可能となったステントグラフトを用いたカテーテル治療の遠隔期成績は良好である。しかしながら、ステントグラフト留置後の急性血栓性閉塞が臨床現場で問題である。そのような背景において、多施設・前向きで施行された本研究では、実臨床現場における大腿膝窩動脈病変に対し、ステントグラフト遠隔期成績及び抗血小板薬薬効と再発の関連性を評価した。結果、実臨床現場でのステントグラフト遠隔期成績は許容されるものであった。一方、再発に関連する因子として血管内超音波で評価した血管径（小血管）は唯一の再発因子あり、PRU値（P2Y12 reaction unit)で評価した抗血小板薬薬効は再発との関連を認めなかった。再発症例に血栓性閉塞が多い本治療において、至適な抗血栓療法を再考する上で重要な結果と考えられた。以上より今回の論文は学位に値すると考える。